

パウロの倫理思想に関する研究の概観と問題点について

A Survey of Studies on Paul's Moral Reasoning, and a Proposal

村山 盛章
Moriyoshi Murayama

キーワード

パウロの倫理思想、人間論、共同体論（教会論）、宇宙論、黙示思想的終末論、古代の病因学

KEY WORDS

Paul's moral reasoning, anthropology, communalism (ecclesiology), cosmology, apocalyptic eschatology, ancient etiology

要旨

パウロの倫理思想に関する従来の研究は、彼の人間論、共同体論（教会論）、宇宙論、黙示思想的終末論を個々に取りあげ、終末論と倫理との不可分の関係も考察してきた。しかし、神学と倫理の区別、個人に特化した倫理観、神と自然（宇宙）を区別する存在論的二元論の影響のために、人間論、共同体論（教会論）、あるいは宇宙論のどれかひとつに傾倒し、それら各論が重層的な関係のなかで展開していることに十分な注意を払うことができなかった。

この研究状況において、1コリント書は、人間論的、共同体論的、宇宙論的関心が顕著であり、それらが黙示思想的終末論に基づいて展開しており、重要なテキストである。今後、この書簡を中心に考察を行い、何がパウロの倫理思想において本質的な原理として機能しているかを解明する。その際、古代の病因学に関する思索や観察（ヒッポクラテス、エンペドクレス、プラトン、ヘレニズム哲学者、ガレノスなど）は、人、共同体、自然（宇宙）の三つの文脈の重層性と相互影響を吟味する上で示唆に富み、有益である。

SUMMARY

Previous studies on Paul's moral reasoning have discussed his anthropology, communalism (ecclesiology), cosmology, and apocalyptic eschatology, and these works have examined the inseparable relationship between eschatology and ethics in Paul's moral reasoning. However, scholars have tended to separate theology from ethics, interpreting Paul's moral reasoning only in terms of the individual and understanding the ancient world from the viewpoint of ontological dualism, which makes a clear distinction between God and the world/the cosmos. Therefore, they have failed to pay due attention to the three interconnected contexts of Paul's moral reasoning: the individual, the community, and the cosmos.

This study argues that 1 Corinthians is the best text to examine in understanding these three interconnected contexts of Paul's moral reasoning and, moreover, that the ancient etiological arguments found in Hippocrates, Empedocles, Plato, the Hellenistic philosophers, Galen, and others are helpful and heuristic in clarifying the logic of Paul's moral reasoning.

1. 問題の所在

パウロの倫理思想に関する従来の研究は、彼の神学を形成する人間論、共同体論（教会論）、宇宙論、黙示思想的終末論を扱い、また終末論と倫理との不可分の関係も考察してきた。しかしパウロの倫理思想において、これらの各論が重層的な関係にあることに十分な注意を払ってこなかった。それゆえ、各論が相互に影響を与えながらパウロの倫理思想を形成していることを見落としてきた。

本小論は、三つの視座（人間論的視座、共同体論的視座、宇宙論的視座）から先行研究を概観することでこの問題点を指摘し、重層的に捉えることができなかった原因と今後の課題について論じる。

2. 人間論的視座

Rudolf Bultmann はパウロ神学を人間論的観点から理解し、その後の研究に大きな影響を与えた注目に値する人物である。「パウロの神学」の緒言で以下のように論じている。

パウロ神学は、神についてその本質それ自身を論じるのではなく、ただ神が人間

に対して、その答責性とその救いに対して、どのような意味を持つかという、そのような形でだけ問題にする。それに応じてまたパウロ神学は、世界と人間とについて、それ自身どのように存在しているかということを論じるのではなく、常に世界と人間を神との関係の中で見ている。神についてのすべての発言は、同時に人間についての発言であり、またその逆もそのとおりである。従ってパウロ神学はこの意味においては同時に人間学である。パウロは世界と人間に対する神の関係を、永遠同一のリズムでもって振れ動く宇宙的出来事の上演を実体とするような宇宙的存在相互の間の関係とは考えておらず、むしろ歴史における神の振舞と、神の行為に対する人間の反応とによって生みだされるものと考えている¹。

この内容は **Bultmann** の視座を如実に説明している。この捉え方において、個人は福音が宣教される対象であり、「信仰の決断」に直面する存在として理解される。そして、歴史に対する神の介入、すなわち、キリストの死と復活という出来事に対して、個人はどのように応答するのが重要な問題となる。**Bultmann** の人間論の偏向は、彼の神話に対するアプローチにも反映されている。すなわち、

神話の本来的の意義は、客観的な世界像を与えることには存しない。むしろ神話は、人間自身が、自己の世界において、自己をいかに理解しているかということを行いあらわしている。神話は、宇宙論的でなく、人間学的に、むしろ実存論的に解釈されることを欲しているのである²。

Bultmann によれば、パウロは黙示的、宇宙論的考えやモチーフをユダヤ教黙示思想の伝承から取り入れ、それらを個人の存在を理解する上で意義あるものとして解釈した。しかしそれは、パウロがその神話的世界観をそのまま継承したことを意味したのではない。**Bultmann** によれば、パウロはそれを非神話化することで個人の実存的問題に対処して行ったのである。このような非神話的、実存論的解釈は、現代人に対して有益なパウロ解釈の手立てを提供した点で評価できる。しかし、古代のテキストを当時の世界観ではなく現代の哲学概念（実存論）を通して読み解くことは、古代人パウロの理解に肉薄するためには時代錯誤的である。**Bultmann** はパウロ書簡に黙示思想的要素を認識しているが、それを人間論のための資料として性急に判断し、宇宙論的な意義に十分な注意を払っていない。確かにパウロは、ギリシア哲学に見られる思弁的体系やそれに基づいた宇宙論を展開していない。もっぱら人間と神との関係性を歴史的に捉えた。しかしこの理解のために、パウロが自然な形で身につけていた古代の宇宙論的感覚を過小評価することになってはいけない。また、**Bultmann** は人間

学を視座に置くことで、結果的にパウロ神学を「個人」の問題からのみ考察することになった。Richard B. Hays は「信仰共同体のあり方に対するパウロの関心が、個人の宗教的題目のための倫理勧告に解釈上変質されている」として、Bultmann に代表される「個人」に特化した解釈を批判している³。

Bultmann に代表される人間論的解釈は20世紀後半に衰退したが、その盛り返しを見ることがある。Moyer V. Hubbard は、パウロ神学における人間論の意義を主張し、黙示的思弁に依拠し過ぎる宇宙論的アプローチを批判している⁴。Hubbard は、キリストあるいは霊における「新しい創造 (καινή κτίσις)」(2コリ5:17; ガラ6:15) が意味、重要性、視野において人間論的であることを主張し、Victor P. Furnish⁵、Charles B. Cousar⁶、Richard B. Hays⁷、J. Louis Martyn⁸が提示する、「新しい創造」の宇宙論的解釈を批判している。2コリ5:17の分析において、Hubbard は救済論、特に個人の改宗／回心の救済論が2コリ2-7章、特に3:16; 4:4-6; 5:5に顕著であることを論じ、宇宙論的ではなく人間論的救済が2コリ5:16-17の基底を形成していると主張する⁹。確かに Hubbard が指摘するように、2コリ5:17に κόσμος という単語はなく τις が καινή κτίσις に関係し、パウロが示す「死と生」の象徴表現の「生」の側面は¹⁰、個人の新しい創造にとって重要な文脈であり (2コリ 3:18; 4:6, 16; 5:14-15)、「キリストにあって」の象徴表現は個人の変容が視野にある (2コリ5:17; ガラ2:19-20他)。こういうわけで Hubbard は、これらの象徴表現がイメージや視野において宇宙論的でなく人間論的救済を示し、2コリ5:17でパウロが「新しい天と地」という黙示思想的概念を抱いていたと考える根拠はないことを論証している¹¹。

Hubbard は、パウロの倫理思想、特に改宗やその関連事項について人間論的意味や価値があることを正しく考察している。しかし彼の方法や視野には「人間論のバイアス」¹²があることに注意すべきである。Hubbard は、パウロの黙示思想を解釈するために、唯一の文脈として人間論を位置づけ、倫理思想に関係する他の文脈 (共同体、世界・宇宙) を無視し、人間の存在を宇宙的文脈に位置づけることをしない。そのため、人 (体) が「世界の断片／一部」¹³、あるいは、諸力が漂う宇宙のなかにある「ひとつの小宇宙」(デモクリトスの原子論、プラトンの『ティマイオス』、新ピュタゴラス主義など)¹⁴である、という古代の世界観を見落としている。パウロにとって、歴史に対する神の介入は、自己の内面 (精神) を変容するだけでなく、神に敵対する宇宙的諸力から世界全体を解放するためでもあったのである。

3. 共同体論的視座

パウロの倫理が共同体的志向であることは従来から認識されてきた¹⁵。たとえば J. A.

T. Robinson は、パウロの人間論は共同体の連帯性を通して個人が全人的な人間となることを語っていると指摘する¹⁶。J. P. Sampley もまた、パウロの倫理が共同体を主要な文脈として位置づけていることを強調する¹⁷。V. P. Furnish は「キリストを信じることは、個人が自己ではなくキリストに属することを意味し、キリストに属することは、キリストのからだ、すなわち、主によって贖われた信仰者の共同体に属することを意味する。キリストに属しそれゆえ信仰者がお互いの属性を共有している事実は、信仰者が選択と行為を行う際の大前提であり、重要な指針である」と論じる¹⁸。

近年 Troels Engberg-Pedersen はその挑戦的な研究で、パウロの倫理思想が「共同体形成的」であると論じている¹⁹。彼は、キリストの出来事による自己理解の変化（改宗／内的変容）は信仰者を共同社会の属性という「社会的完成・成就」へと導くと主張する²⁰。Engberg-Pedersen はパウロとストア派を比較しながら、それぞれの思考構造に共通するモデルを見出す。個人 (I) がキリスト (X) に出会い、自己認識の変化を経験し、自己の中にキリストが生きていることを見出す。この経験を通して、個人は、自己 (I) を離れ、社会的集団の「わたしたち」(S) に属していることを知覚する。この集団にはその他の信仰者もキリスト信仰によって属している。この新しい生活形態は集団的生活、すなわち、信仰共同体 (S) に深く根ざしている²¹。この I → X → S のモデルは、ストア派の倫理学に由来する。それによると、宇宙の一部としての個人 (I) は、宇宙全体に浸透している神性なロゴス・理性 (X) を共有していることを認識する。そして、ストア派の賢人は、他の賢人も共有するこの理性に従って生きるべきであり、この有り様が「賢人のユートピア共同体」(S) を形成している²²。Engberg-Pedersen が論証しているように、このモデルは、人間論（個人）と共同体論（他者・集団）との結びつきを解明する良い機会を私たちに提供している。

Hubbard と同様に、Engberg-Pedersen は人間論の意義（改宗、自己同一化の変化）を I → X 又は X → I の関係を軸に包括的に注意深く考察している。しかし同時に、Engberg-Pedersen は、パウロの倫理思想が共同体的次元に統合的な役割を与えていると論じる。これは、I → X → S のモデルが S の軸（共同体）で完成していることから領けるところである²³。Engberg-Pedersen の研究は、方法論や命題が明瞭で理解しやすい。しかし彼は、パウロの倫理思想が内包している黙示思想的な宇宙論の次元を十分には議論できていない。Engberg-Pedersen は、パウロの基本的な世界観が「宇宙論付き神学」であると認めつつ、「パウロが理解した同じものを現代の私たちが現実的に選択することにはならない」とし²⁴、古代の世界観に肉薄しようとする今までの試みが不成功に終わったと結論づけている²⁵。

その代わりに彼は、パウロの思考における人間論的、教会論的（彼の表現では「倫理的」）な側面が現代の私たちにとって現実的な選択肢の一つになり得ると論じる。

Engberg-Pedersen は、倫理思想における認知プロセスが現代の私たちにとって現実的な選択肢のひとつであると考えため、彼はパウロの倫理構造と論理的パターン (I → X → S のモデル) に焦点を当てた。そのため、「宇宙論付き神学」、人間論、教会論 (共同体論) が織り成す重層性を捉えていない。結果として、パウロの黙示思想的世界観の宇宙論的次元は、考察対象から除外され後背へと退いている²⁶。

共同体論的視座は、この世とキリスト信仰共同体との対峙という観点から考察する研究においても顕著である²⁷。Wayne A. Meeks はパウロの黙示思想的言語の社会的側面を考察し、John G. Gager の理論に従いながら²⁸、パウロの教会が千年王国的であったと論じている²⁹。パウロの黙示思想的言語が1テサロニケ書、ガラテヤ書、1コリント書においてどのように用いられているかを考察し、それが千年王国的機能を持っていることを論証している。Meeks は、各書簡の執筆状況が異なるにもかかわらず、これら三つの書簡の目的は、「共同体の結束と安定」であることを正しく指摘し³⁰、パウロの黙示思想的見解がこの目的を達成するために役立てられたことを論証する。Meeks は、パウロの黙示思想的信念が、「包括的な認識地図、すなわち、現実についての別のヴィジョン」として機能し、千年王国論的もしくは終末論的共同体の社会的勢力を形成し育てる、と結論づける³¹。また Robert Jewett は、テサロニケにあるキリスト信仰共同体の政治的、経済的、社会的、宗教的状况がメシア的千年王国主義の枠組みにうまく当てはまることを論証する³²。テサロニケの状況において、パウロの黙示思想的エトスがテサロニケの信徒を励まし、千年王国的信仰をもってその信仰共同体を育てることを促したのである。Dale B. Martin は、ギリシア・ローマのエリート文化に順応していた「強い者」(コリント教会) の影響を制限し対抗するために、パウロの黙示思想的見解がどのように機能したかを考察する³³。この世の常識や慣習を相対化できる黙示思想的見解に基づいて、パウロはこの世的価値に依拠する上流階級(したがって教養人) のイデオロギーに反対することになった。パウロ自身の教育レベルが「強い者」と近かったにもかかわらず、知恵、哲学、修辞学、さらに清浄や人体についての理解に関して、パウロと「強い者」が相反する見解をもつに至った、と Martin は論じる。Martin の考察は、パウロの黙示思想的見解を社会的地位、そして「強い者」との衝突、それぞれに関係づけている点で注目し値する。Richard A. Horsley³⁴と Neil Elliott³⁵は、パウロの黙示思想が内包する先鋭化した政治的二元論を論じ、パウロの教会は、ローマ帝国が君臨する社会に対して「もう一つの社会 (代替社会)」として存在していた、と主張する。

以上の先行研究は、パウロの黙示思想的世界観がキリスト信仰共同体の連帯を強化し、外部の社会が享受する世界観を相対化かつ否定でき、この世とキリスト信仰共同体との差異を形成することに大きな役割をもっていることを論証してきた。しかしな

がら、人間論、共同体論、宇宙論（黙示思想的な世界観や天使論など）の三つの論を総合的に捉え、その重層性を捉える試みは見当らない。

4. 宇宙論的視座

Ernst Käsemann は宇宙論的視座からパウロ神学を解説する代表的研究者と言える。彼の師匠である Bultmann は実存主義的・人間論的アプローチに終始した。この傾向を批判して Käsemann は、「人間論はそれ自体宇宙論でなければならない。また逆に、宇宙はパウロによって人間論的観点からもっぱら理解されている」として、人間論と宇宙論の表裏一体を論じる³⁶。また、古代の宇宙観によると、人間の身体は外界の諸力から大きな影響を受けている。外界の諸力は安定せず個々が衝突し合うため、それが人間の身体にも影響を及ぼしている。このような古代の宇宙観を十分に理解しながら、Käsemann はキリスト信仰者の存在が、二つの主要な外界の力（キリストの主権と宇宙的諸力）の関係によって決定づけられると論じる³⁷。初期キリスト教は、黙示思想的終末論を享受し、パウロも例外ではなかった。この思想は、神に敵対する天的な諸力が終末時に神の力によって殲滅されると考えるが、このイメージは古代の宇宙観に照らし合わせて理解する必要がある。この点について Käsemann は、「人間の生活は最初から神とこの世の諸力との対決にさらされている。人間の生活は、この世の主権を求める諸力による宇宙的戦闘を反映する具体物であり、そのような存在として人間は、黙示思想的によってのみ理解できる」と論じる³⁸。

J. Louis Martyn は、Käsemann の議論をさらに展開させて、ガラ5:13-24の倫理勧告を πνεῦμα（霊）³⁹と σάρξ（肉）の黙示思想的戦闘の観点から解釈し、人間の道徳的生活に宇宙的次元の力学が関わっていることを論じる⁴⁰。Martyn によると πνεῦμα と σάρξ はキリストの到来以来、「黙示思想的二律背反」あるいは「戦闘的二律背反」を形成している⁴¹。そのためガラ5:17やロマ8:1-17が象徴的に示すように、信仰者は外界の二つの相反する勢力の狭間で身動きができない状況に陥っている。そこでは人間の意思を遂行することは困難であり宇宙的諸力が戦闘を展開している⁴²。この状況を、σάρξ は「人が πνεῦμα に導かれたとき行ふ善」を行わないという意味を持って πνεῦμα に敵対し、逆に πνεῦμα は、「人が σάρξ に導かれたとき行ふ悪」を行わないという意味を持って σάρξ に敵対する、と理解することができる⁴³。

Martyn が主張する宇宙論的霊肉二元論は興味深く、古代人の宇宙観を考慮した示唆に富む洞察である。加えて、宇宙論的視座を強調する研究者のなかでも Martyn のアプローチは顕著である。なぜなら彼は、ユダヤ教の黙示思想的文書、そこには宇宙的闘争の形象が溢れているが、それらの文書の特徴を掴むことでパウロの倫理思想に

における宇宙的な戦闘的衝突の形象を包括的に探索しているからである⁴⁴。今まで、宇宙における天的・靈的存在の活動は、パウロの倫理思想に関連づけて詳しく考察されることはほとんどなかった。なぜなら、それらの活動は、魔術、占星術、神秘主義、天使論などのテーマのもとで通常論じられて来たからである⁴⁵。この傾向に対して Martyn は、これらの諸力の活動がパウロの倫理思想や黙示思想的展望にどのように深く関係しているかを探究し、倫理的な相克が人間の奮闘だけでなく、個人やキリスト信仰共同体に働く神の πνεῦμα、それがもつ神秘的又は宇宙次元の力学に関係していることを論じているのである。

Käsemann や Martyn はパウロの倫理思想の宇宙論的文脈を適切に考慮している点で注目し値する。しかしながら、Hubbard や Engberg-Pedersen が指摘するように⁴⁶、彼らの関心が宇宙論に偏向するため、人間論的な意義（個人の責任や決断など）を必要以上に後退させてしまっている。というのも人間は「肉もしくは霊によって満たされる空っぽの器」ではなく⁴⁷、主体性を持っているのである。事実、パウロは人間側の責任を問うている（たとえば、「この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず」（ガラ5:13）、「霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません」（5:16）、など）。上述したように、人（体）は「世界の断片／一部」であり、諸力が漂う宇宙のなかにある「ひとつの小宇宙」である。この世界観のなかで、パウロは、人間側の道徳的葛藤と宇宙的諸力の闘争を同時進行的に捉えているのではないだろうか。

5. 主な原因

以上概観したように、パウロの倫理思想に関する従来の研究は、パウロ神学の人間論、共同体論（教会論）、宇宙論、そして黙示思想的終末論を個々に扱い、また終末論と倫理との不可分の関係を考察してきた。しかし、それら各論が重層的な関係をもって展開していることに十分な注意を払ってこなかった。その原因として、少なくとも三点をあげることができるだろう。

まず、M. Dibelius が様式史的批評に基づいて、神学と区別された「倫理的勧告（パレネーゼ 独 Paränese）」⁴⁸を提唱し、その後のパウロ研究に少なからず影響を与えてきたことである⁴⁹。Dibelius によると、例えばガラ5:25-6:10はパウロ神学から独立しており、その内容は初期キリスト教の伝承やユダヤ教知恵文学（ヘレニズム哲学者も共有したもの）からの借用である⁵⁰。無論、パウロの倫理思想がユダヤ教やヘレニズム文化から影響を受けたことを否定することはできないが、神学と倫理勧告は表裏一体であり、とりわけパウロは信仰共同体を形成する上で神学と倫理の結びつきを大

切にしている。また、パウロ神学は黙示思想的終末論と密接に関係している。それゆえ、神学と倫理を区別する方法は、結果として、黙示思想的終末論と倫理勧告との重要な関係を適切に考察することを阻むことになった。

二つ目に、個人主義的な価値を重んじる近・現代の欧米社会のキリスト教（またその影響下にある日本のキリスト教）は、倫理を個人の問題として第一義的に理解する傾向にある。特にプロテスタント教会では、ルターの信仰義認論の影響が今なお強く、倫理はもっぱら個人の罪意識と善行との関係（良心の呵責など）として捉えられ、その関係を個人の信仰の問題（その解決が信仰義認論）として理解する傾向にある。このことは、新約聖書学においても例外ではない。Bultmann は、現代人に一定の説得力をもつ実存論的解釈を展開した。しかし前述したように、解釈の視点をもっぱら「個人の信仰（決断）」に固定することで、神学を「人間の解釈」として把握した。その結果として、パウロの倫理勧告が要請してくる、個人と共同体、さらに宇宙との相互関係やそれら三つを統合的に理解する視座を持つことができなかった。

三つ目に、近代の啓蒙思想以降、神と自然（宇宙）が切り離されたことである（存在論的二元論）⁵¹。後者は理性の考察対象とされ、前者は「超自然」として対象外とされた。この世界観に基づいて、神によってそれまで一元的に支配されてきた西欧キリスト教社会は、神の世界を冒瀆することなく、自然を批判的に考察解明し、技術を発展させることができた（その成果が自然科学である）。そこでの考察内容は、人の知識や知恵が及ぶ範囲に限定されることになった。この世界観は現代の私たちも共有しており、新約聖書学者の考察態度にも散見される⁵²。しかし古代人パウロにとって、神と人は同一の世界に生きている（存在論的一元論）。パウロと同時代のストア哲学では、ロゴス（神）は自然（宇宙）にあってその秩序そのものと捉え、人間の理性は宇宙に充満する神の理性の一部と考えられた⁵³。また、自然には、天使、悪霊、サタン、諸霊、天体など宇宙的諸力が活動し、人はその自然の構成員としてこれらの影響を直接に受けると考えられた（前1世紀に始まった新ピュタゴラス主義など）。黙示思想的終末論は、この世界観を前提に展開していることは明白である。しかしこのような宇宙論的視座は、一部を除いて従来の研究には欠けていたのである。現代の研究者は、悪霊論を始め古代の宇宙論を共有できないために、パウロの黙示思想的二元論をたんなる精神的な二元論に矮小化してしまっている。彼の倫理思想に見られる二元論は、個人の内面に生じる、いわゆる「良心の呵責」のみでは説明しきれないダイナミズムがある。つまり、外界の世界（地上や宇宙）で展開する諸力、そしてそこに介入する神の働きとしての πνεῦμα が、個人の倫理や共同体の形成に強い影響を与えるのである。

6. まとめ（今後の課題）

このようにパウロの倫理思想に関する従来の研究は、神学と倫理の区別、個人に特化した倫理観、神と自然（宇宙）を区別する存在論的二元論の影響のために、人間論、共同体論（教会論）、あるいは宇宙論のどれかひとつに傾倒してしまう嫌いがあった。この研究状況に対して、1コリント書、特に4:9; 5:3-5; 6:3; 7:5; 10:20; 11:10; 15:24-25は重要な考察の機会を提供している。なぜなら、これらのテキストにおいて、人間論的、共同体論的、宇宙論的関心が顕著に見られ、それらが黙示思想的終末論に基づいて展開されているからである。今後、1コリント書を主要な考察テキストとして取り上げ、人、共同体、自然（宇宙）の三つの文脈の重層性とこれらの相互影響が、古代人パウロの倫理思想において本質的な原理として機能していることを解明することを目指す。

この課題を行う際に、古代ギリシア・ローマ世界の病因学に関する思索や観察は示唆に富む（前5世紀のヒポクラテス、エンペドクレス、プラトン、そしてヘレニズム哲学や後2世紀のガレノスに至るまで）⁵⁴。古代病因学の内容は多岐にわたるが、共通して身体と自然（宇宙）との境界線は強く認識されていなかった。換言すると、身体は多孔性と透過性が高く、外部から様々な因子が自由に入り込む存在と考えられていた。古代の病因学的な思考は大きく二つに分けられるが（侵入論と不均衡論）⁵⁵、侵入論によると外部から身体に物質が入り込み病気を引き起こすと考えた。この理解は現代医学にも通じるものであるが、その外因子は物質だけでなく、特に魔術や迷信において悪霊や諸霊など宇宙的諸力も外因子として想定された。他方、ヒポクラテス派に代表される不均衡論は、体内の物質の不均衡（内因子）が病気を引き起こすと考えた。後1世紀、ストア哲学の影響を受けたアテナイオスは、「 pneuma 医学派」を創設したが、この医学派によると、 pneuma は外部から身体に入り全身に行き渡るが、その pneuma の流れが滞ることで病気が生じると考えた⁵⁶。

パウロがどのような病因学的な思考を共有していたかは定かでないが、パウロが信仰共同体に倫理勧告を行う際、 pneuma やサタン、天使などの諸力に言及していることは注目に値する。彼の言説を古代の病因学的な思考と比較考察することで、パウロの倫理思想における、人、共同体、自然（宇宙）の重層的な相互関係を解明することにつながるのではないと思われる。

注

- 1 『ブルトマン著作集4 新約聖書神学Ⅱ』（川端純四郎訳）（新教出版社、1966年）8頁。
- 2 R. ブルトマン（山岡喜久男訳）『新約聖書と神話論』（新教出版社、1999年）27頁。
- 3 R. B. Hays, "Ecclesiology and Ethics in 1 Corinthians," *Ex Auditu* 10 (1994): 34.
- 4 M. V. Hubbard, *New Creation in Paul's Letters and Thought* (Cambridge: Cambridge University Press, 2002).
- 5 V. P. Furnish, *II Corinthians: A New Translation with Introduction and Commentary* (New York: Doubleday, 1984) 332-33.
- 6 C. B. Cousar, *A Theology of the Cross: The Death of Jesus in the Pauline Letters* (Minneapolis: Fortress Press, 1990) 76-82.
- 7 R. B. Hays, *The Moral Vision of the New Testament: Community, Cross, New Creation* (New York: HarperCollins, 1996) 20.
- 8 J. L. Martyn, *Galatians: A New Translation with Introduction and Commentary* (New York: Doubleday, 1997) 570-74.
- 9 M. V. Hubbard, *New Creation in Paul's Letters and Thought* (Cambridge: Cambridge University Press, 2002) 133-87.
- 10 Hubbardによると、この象徴表現の「生」の側面は「霊」「新しさ」「命」であり、「死」の側面は、「肉」「古いもの」「以前の生活」「人間の価値システム」である（Hubbard, *New Creation*, 183-85, 211, 216他）。
- 11 Hubbard, *New Creation*, 179-80, 185.
- 12 J. C. Walters, review of *New Creation in Paul's Letters and Thought*, by M. V. Hubbard, *RelSRev* 30 (2004): 71.
- 13 E. Käsemann, "On the Subject of Primitive Christian Apocalyptic," in *New Testament Questions of Today* (London: SCM Press, 1969) 136.
- 14 D. B. Martin, *The Corinthian Body* (New Haven: Yale University Press, 1995) 16、M. R. Wright, *Cosmology in Antiquity* (London: Routledge, 1995) 56-74.
- 15 本文で言及した研究に加えて、E. Schweizer, *The Church as the Body of Christ* (Richmond, Virginia: John Knox Press, 1964)、B. Gärtner, *The Temple and the Community in Qumran and the New Testament: A Comparative Study in the Temple Symbolism of the Qumran Texts and the New Testament* (Cambridge: Cambridge University Press, 1965) 49-71, 123-42、R. H. Gundry, *Sōma in Biblical Theology with Emphasis on Pauline Anthropology* (Cambridge: Cambridge University Press, 1976)、T. J. Deidun, *New Covenant Morality in Paul* (Rome: Biblical Institute Press, 1981)、E. E. Ellis, "Sōma in First Corinthians," *Int* 44 (1990): 138-40、E. E. Ellis, *Pauline Theology: Ministry and Society* (Grand Rapids: Eerdmans, 1989; reprint, Lanham, Maryland: University Press of America, 1997)、B. S. Rosner, "'OYXI MALLON EPIENΘHETE' Corporate Responsibility in 1 Corinthians 5," *NTS* 38 (1992): 470-73、S. C. Barton, "The Communal Dimension of Earliest Christianity: A Critical Survey of the Field," *JTS* 43 (1992): 399-427、R. Banks, *Paul's Idea of Community: The Early House Churches in Their Cultural Setting* (Peabody, Mass.: Hendrickson Publishers, 1994)、R. B. Hays, "Ecclesiology and Ethics in 1 Corinthians," *Ex Auditu* 10 (1994): 31-43を参照。さらに比較的新しい二つの研究も、パウロの倫理思想における共同体の文脈の重要性を強調している（S-W. Son, *Corporate Elements in Pauline Anthropology: A Study of Selected Terms, Idioms, and Concepts in the Light of Paul's Usage and Background*

- [Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblico, 2001]、J. A. Adewuya, *Holiness and Community in 2 Cor 6:14-7:1: Paul's View of Communal Holiness in the Corinthian Correspondence* [New York: Peter Lang, 2001]).
- 16 J. A. T. Robinson, *The Body: A Study in Pauline Theology* (London: SCM Press, 1952).
- 17 J. P. Sampley, *Walking Between the Times: Paul's Moral Reasoning* (Minneapolis: Fortress Press, 1991) 37-43.
- 18 V. P. Furnish, *Theology and Ethics in Paul* (Nashville: Abingdon Press, 1968) 237.
- 19 T. Engberg-Pedersen, *Paul and the Stoics* (Louisville, Kentucky: Westminster John Knox Press, 2000) 128, 130, 140, 157, 160, 166, 177他.
- 20 Engberg-Pedersen, *Paul and the Stoics*, 112, 113他.
- 21 Engberg-Pedersen, *Paul and the Stoics*, 33-44. このモデルにおいて、X → I の移動（召命、神側からのこの世・人間への介入）も不可欠の要素である（同上98-103, 139-140, 145, 148他）.
- 22 Engberg-Pedersen, *Paul and the Stoics*, 45-79.
- 23 Engberg-Pedersen は、パウロの倫理思想は「徹頭徹尾社会的」であり、ストア派的ユートピア概念に類似した「共有された生活様式」を目指していた、と論じている（*Paul and the Stoics*, 294）.
- 24 Engberg-Pedersen, *Paul and the Stoics*, 17.
- 25 Engberg-Pedersen, *Paul and the Stoics*, 16-22, 26. Hays は、新約聖書の倫理を学ぶための四つのステップを提案している。すなわち、記述的（テキストを歴史的に読むこと）、統合的（テキストを正典として読むこと）、解釈的（テキストを現代に関係づけること）、そして実践的（テキストを実践すること）（*The Moral Vision*, 3-7）。これら四つの課題を扱うことは本小論の範囲と能力を超えるため、一つ目の課題に焦点を当てる。
- 26 パウロの思考における人間論的、共同体論的側面を他の側面（黙示思想的、宇宙論的）と完全に切り離して評価することは問題である。Engberg-Pedersen も認めているように、後者は前者と密接に絡みあっているのである（Engberg-Pedersen, *Paul and the Stoics*, 24-25）.
- 27 このテーマに関する有益な概要について、H. C. Kee, *Knowing the Truth: A Sociological Approach to New Testament Interpretation* (Minneapolis: Fortress Press, 1989)、B. Holmberg, *Sociology and the New Testament: An Appraisal* (Minneapolis: Fortress Press, 1990)、S. C. Barton, "The Communal Dimension of Earliest Christianity: A Critical Survey of the Field," *JTS* 43 (1992): 399-427を参照。
- 28 J. G. Gager, *Kingdom and Community: The Social World of Early Christianity* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1975)。Gager は人類学的モデルのひとつ（「千年王国的カーゴ・カルト（積荷崇拜）millenarian cargo cults」）を利用しながら、最初期のキリスト教が千年王国運動であると論じている。
- 29 W. A. Meeks, "Social Functions of Apocalyptic Language in Pauline Christianity," in *Apocalypticism in the Mediterranean World and the Near East: Proceedings of the International Colloquium on Apocalypticism, Uppsala, August 12-17, 1979*, ed. D. Hellholm (Tübingen: J.C.B. Mohr, 1983) 687-705、W. A. Meeks, *The First Urban Christians: The Social World of the Apostle Paul* (New Haven: Yale University Press, 1983) 171-80。千年王国運動において、運動体と外部社会との境界線、内部の連帯と団結、規範的行為と逸脱行為に対する賞罰などが強調された（Meeks, "Social Functions," 700）。なお Meeks は、人類学的用語の「千年王国論的」が「終末論的信仰」と変換可能であるとしている（"Social Functions," 688）.
- 30 Meeks, *The First Urban Christians*, 179.
- 31 Meeks, "Social Functions," 701.

- 32 R. Jewett, *The Thessalonian Correspondence: Pauline Rhetoric and Millenarian Piety* (Philadelphia: Fortress Press, 1986) 113–32, 161–78.
- 33 Martin, *The Corinthian Body*.
- 34 R. A. Horsley, “1 Corinthians: A Case Study of Paul’s Assembly as an Alternative Society,” in *Paul and Empire: Religion and Power in Roman Imperial Society*, ed. R. A. Horsley (Pennsylvania: Trinity Press International, 1997) 242–52. E. Adams もパウロの黙示思想的世界観を取り上げ、κόσμος の用語が、キリスト信仰共同体が属し (1コリ4:20)、あるいは将来継承するところの「神の国」(1コリ6:9–10; 15:23–24, 50) に対峙して、意味づけられていると論じる (*Constructing the World: A Study in Paul’s Cosmological Language* [Edinburgh: T & T Clark, 2000] 105–49). たとえば「パウロは κόσμος を否定的に使用しているが、ほとんどの場合、κόσμος が『この世』という黙示思想上否定の意味を帯びている」(同上、147).
- 35 N. Elliott, *Liberating Paul: The Justice of God and the Politics of the Apostle* (Maryknoll, New York: Orbis Books, 1994) 93–230.
- 36 E. Käsemann, “On Paul’s Anthropology,” in *Perspectives on Paul* (Philadelphia: Fortress Press, 1969) 23.
- 37 E. Käsemann, “The Righteousness of God’ in Paul,” in *New Testament Questions of Today* (London: SCM Press, 1969) 176. また、彼は「宇宙論と人間論との緊張関係がパウロ神学の全体を特徴づけている」と述べる (*Commentary on Romans* [Grand Rapids: Eerdmans, 1980] 33). R. Jewett は、その緊張を宇宙の次元と人間の次元との奇妙な混合として描いているが、これはクムラン文書にも見られるユダヤ教黙示思想に由来すると認識している (*Paul’s Anthropological Terms: A Study of Their Use in Conflict Settings* [Leiden: E. J. Brill, 1971] 94).
- 38 E. Käsemann, “On the Subject of Primitive Christian Apocalyptic,” in *New Testament Questions of Today* (London: SCM Press, 1969) 136. また彼は「世界は結局のところ、中立的な場所ではなく、争い合う諸力の戦場である。それゆえ、人は個人的にも社会的にも、その闘争に巻き込まれ、人を支配する力を主唱することになる」と論じる (*Commentary on Romans*, 150).
- 39 πνεῦμα という単語は「空気、風、氣息、精気、精霊、魂」などと訳されるようにニュアンスは多岐にわたる。しかし古代人は共通して πνεῦμα が動力に関係する実在物と理解していた (E. Schweizer, “πνεῦμα” in *TDNT*, vol 6, 332–339).
- 40 Martyn, *Galatians*, 97–105, 479–540; *ibid.*, “Apocalyptic Antinomies,” in *Theological Issues in the Letters of Paul* (Nashville: Abingdon Press, 1997) 111–23.
- 41 Martyn, *Galatians*, 97–105, 479–501.
- 42 H. D. Betz, *Galatians* (Philadelphia: Fortress Press, 1979) 280.
- 43 E. de W. Burton, *A Critical and Exegetical Commentary on the Epistle to the Galatians* (New York: Charles Scribner’s Sons, 1920) 302; R. N. Longenecker, *Galatians* (Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1990) 246.
- 44 同様の研究は、たとえば、P. W. Macky, *St. Paul’s Cosmic War Myth: A Military Version of the Gospel* (New York: Peter Lang Publishing, 1998)、G. B. Caird, *Principalities and Powers: A Study in Pauline Theology* (Oxford: Clarendon, 1956)、W. Wink, *Naming the Powers: The Language of Power in the New Testament* (Philadelphia: Fortress Press, 1984) などを参照。
- 45 たとえば、C. E. Arnold はコロサイ書とエフェソ書の歴史的な脈を再構築するさい、これらの書簡の受信者が魔術、迷信的信念に根差した回心前の生活から完全には解放されていないと論じる (*Ephesians: Power and Magic: The Concept of Power in Ephesians in Light of Its Historical Setting*

- [Cambridge: Cambridge University Press, 1989]; *ibid.*, *The Colossian Syncretism: The Interface Between Christianity and Folk Belief at Colossae* [Grand Rapids, Michigan: Baker Books, 1996].
- 46 Hubbard, *New Creation*, 特に177-83, 215-18, 222-41. Engberg-Pedersen は、「新しい創造」という用語にある宇宙的默示的ニュアンスを無視することはできないが、同時にその用語が「実際『人間論的』な文脈にある極めて具体的なことに関連」し、「個人的にキリスト信仰を持ち、共にキリスト信仰者のグループを形成する人たち」と関連することを認識しなければならない、と正しく指摘している。(Paul and the Stoics, 346).
- 47 H. Räisänen, *Paul and the Law* (Philadelphia: Fortress Press, 1986) 115.
- 48 ギリシア語の παραίνέω「勧告する」、παραίνεσις「勧告、忠告」に由来する。
- 49 Dibelius の影響は、例えば H. Conzelmanns の1コリ5と1コリ6の悪徳表についての注解 (*1 Corinthians: A Commentary on the First Epistle to the Corinthians* [Philadelphia: Fortress Press, 1975] 100-01) や Betz のガラ5:25-6:10の解説 (*Galatians*, 291-93) などに見られる。
- 50 M. Dibelius, *A Fresh Approach to the New Testament and Early Christian Literature* (London: Ivor Nicholson and Watson, 1936) 143-44, 217-20, 223-24; *From Tradition to Gospel* (New York: Charles Scribner's Sons) 238.
- 51 デカルト (フランスの哲学者。1596-1650年) の精神 (非物質) と身体 (物質) とを区別する概念定義 (『デカルト著作集2 省察および反論と答弁』(白水社、1973年)) がその後の西洋思想の方向性を決定づけたと言われる (K. レーヴィット (柴田治三郎訳) 『神と人間と世界—デカルトからニーチェまでの形而上学における—』(岩波書店、1973年))。
- 52 例えば、朴憲郁は「超自然的力」の影響を認めつつも、聖霊に導かれた生活が「心情と理解力」という人間の働きを通して押し進められることを強調している (『パウロの生涯と神学』(教文館、2003年) 231頁)。
- 53 A. H. アームストロング (岡野昌雄他訳) 『古代哲学史 タレスからアウグスティヌスまで』(みすず書房、1987年) 169頁。
- 54 参照、二宮陸雄『ガレノス 霊魂の解剖学』(平河出版社、1993年)。
- 55 Martin, *The Corinthian Body*, 146-62.
- 56 ガレノス『ヒポクラテスとプラトンの学説1』(京都大学学術出版会、2005年) 117頁、脚注3。